

総括コメントにかえて

高橋 一樹

二〇一四年度立教大学史学会大会シンポジウムとして開催された「ユーラシア東西における古文書学の現在」は、東アジア（日本・朝鮮半島）・西アジア・ヨーロッパにおける、中世（ここでは九〜一三世紀に時期の限定がなされる）の文書史料論を対象とした比較研究の試みである。ここでは、当時の各国家における文書史料をその形式に主眼をおいて突き合わせる際に、時間的・空間的な広がりを強く意識することが意図された。とりわけ空間の問題に即していえば、ともに漢字を受容した近隣関係にある朝鮮半島と日本列島、モンゴル期の帝国とそれに包摂された個別の王朝、あるいは直接的な交渉・影響関係のないヨーロッパと東アジア、などの論点がさまざま浮上してくる。さらに、シンポジウムのタイトルからうかがえるのは、

日本でいうところの古文書学にあたる、歴史研究の主たる素材となる文献史料のうちの文書をめぐる学問的体系、それ自体の相互参照と各自の研究方法の相対化も射程におさめられていたことである。歴史情報を有するメディアとしての文書史料をアプリオリに比較するだけにとどまらない、より複眼的な視点が準備されていたといつてよい。

シンポジウム当日の興味深い四報告の内容をふまえ、討論の最初に行ったコメントでも、右のような主催者側の意図をひきつぐかたちで、日本中世史料論に軸足を置きながら比較の視点を設定した。

まず第一に（時間的広がり）では、とくに先行する古代の文書とその体系が中世のそれといかにかかわっているのか、という問題を掲げた。

古代の中世に対する規定性の如何ということだが、日本ではこれが古くて新しい喫緊の課題であることを佐藤報告は実証的かつ論理的に示していた。また、川西報告も朝鮮半島における伝来文書の少なさに苦慮しながらも、古代中国からの継承関係にとどまらず、高麗王朝の独自文書を抽出し意味づけようとしていた。

これらは、中世社会において文書の機能を担保した文書そのものが帯びる要素はなにか、という課題にもつながる。文面以外に文書を構成するものでは、日本以外の報告で証人のサインや王の印、あるいは侍臣の副書といった点が挙げられたが、意外にも日本中世文書では発給者のサイン以外に意識されてこなかった研究状況を浮き彫りにしたように思われる。

第二の（空間的広がり）については、咄嗟に思いつく比較軸の例をさきあげたが、より具体的には帝国の版図において、四日市報告の注目する文書のフォルムや印の模倣・継承などの現象からなにを読み取るか、という課題がうかびあがる。権威づけや外交的關係の反映とみるだけでなく、文書の作成などにかかわる技術・知識をともなった人的移動の有無や王朝ごとの濃淡はないのか、書体や文字の選択的使用がもつ意味はなにか、というほかの国家や地域にも普遍性をもつ問題関心を呼び起こす。

さらに菊地報告では、国王発給の公文書から私的法的行為にもとづく私文書にいたる、ある定式表現の継承とその盛衰から歴史情報を読み取る方法が重視されていた。もちろん時間の問題も含まれるが、文書の作成や機能にかかわる階層的・空間的な結節のあり方を掘り起す作業にもなっている。

前述した時間軸とも重なり合いながら、これらは文書の世界に見え隠れする地域性の抽出にアプローチするものにはかならない。たとえば、東アジアでは古代中国の行政文書体系に淵源をもつ朝鮮半島と日本列島とで、そこから逸脱する文書のかたちがいっつ、どのような経緯のもとであられるか、あるいは日本列島規模で文書形式の均質性が一定の装飾性をともないながら中世末期に一部崩れるのはなぜか、といったような着想を導く。

こうした比較の視点をより発展的に集約する意味で、第三に、機能とかかわる文書の目に見えるかたちを比べることの有効性を提起した。文書の人為的なまとまりとその様相の変化、文字列以外の情報の質や量にバリエーションを加える紙や木といった素材やその使い方、などの解析である。多国間の比較にとどまらず、文書という特定の書面が中世という時代に、それぞれの国家や地域で、いかなるモノとして作られ、使われているのか、という根本的な問い

に対しても不可欠な作業といえよう。

シンポジウムでの報告内容にとどまらず、各報告者は豊かな史料情報を蓄えている。それにもとづいたりプライを期待しつつ、以上の三点をさらに具体化するべく私から示した論点は、つぎの五つである。これらは、中世という時期を限定する際の指標ともないうるであろう。

- ① 文書というメディアを生成・使用しうる階層的範囲とその歴史的背景。
 - ② 現存しない文書や書面を歴史情報の抽出や分析に組み込む方法。
 - ③ 文書と口頭の音声との外在的關係（書かれた文面を読み上げる、など）以外のかかわり。
 - ④ 文書の作成や授受、保管と廃棄のあり方に付随する人的な儀礼・所作。
 - ⑤ 文書をめぐる研究の枠組みやその歴史の変遷。
- いずれも日本中世の史料論研究に携わる立場から、日韓を中心とする比較研究の場で得られた耳学問の成果に加え、近年の研究動向に触発された思いつき程度のものでしかないが、最後の⑤については、前述したシンポジウム主催者側の趣旨を継承することに加えて、少し個人的な経験を補足しておきたい。

モノとしての文書史料から観察される多様な現象をどん

な方法でいかに認識し、どのように説明しているか。そこから歴史的な情報を抽出する手続きについても、概念はもとより用語などの基本事項や共通理解はいかなる内容もち、それらが生成され定着するうえで、国家ないし地域ごとにどのような異同があるのか。比較史料論において、こうした課題をも議論の俎上にのせることの有効性は、私自身、この十数年間に参加したいくつかの共同研究プロジェクトで実地に学ぶことができた。

印象深い一例をあげれば、偽文書に関する中世の史料論的分析がドイツと日本とでほぼ同じ時期にはじまりながら、研究の目的と展開に相違があり、その概要と背景を互いに解説することで、彼我の文書史料をめぐる学問的状況の内在的な理解に一役買った、という場面は鮮明な記憶となっている。

異文化間での文書史料の比較が、それぞれの文書をとリまく社会的なコンテクストとその異同を浮かび上がらせるように、文書についての語り方を意識的に対照させることもまた、比較史料研究ひいては比較史研究のユニークな手段たりうるのである。

シンポジウム当日は時間的な制約ゆえに、またコメントの論点が多岐にわたったために、十分な議論はなしえなかった。しかし、フロアからも、コメントの内容を受け止め

たうえで、いくつかの有益な発言や提言を得ることができた。口頭から発せられる「ことば」とそれを聞く行為が重視された古代ローマ社会における、その内容を可視化した文書の作成と意義（共有の場・機会）をとらえようとする研究動向の紹介、さらにそれを起点とした比較史料論の可能性への言及、あるいは、紙以外の素材（たとえば石材）をもちいる文書の作成意図と現実にはたされた機能の比較的分析、などである。今回のような機会の発展的な継続を可能にする内容でもあり、その呼び水になったとすれば、ディスカッション冒頭のコメントとして、最低限の責を塞ぐことができたかと思う。

最後に、感想めいた話で恐縮だが、今回のシンポジウムに参加して感慨深く思ったのは、報告の労をとられた「古文書を研究対象とする四名の若手研究者」（主催者側による「開催趣旨」とかれらの専門とする史料との距離の近さである。

東洋史・西洋史の分野に関する報告者たちは、いずれも長年にわたって現地の大学等に留学し、そこで原本を含めた文書史料に深く沈潜した研究を行い、その成果を学位論文にまとめ、現在も史料調査などを通じて原本やそれに准じる情報に親しく接する機会をもち、そのための現地研究者との信頼関係を保ち続けている。また日本史を専門とす

る報告者も、オリジナル史料へのアクセスを欠かさず、在外日本史料の調査を含めた比較研究に強い意欲をもち、古文書のなりたちやその枠組みを再検討する論考も積極的に公表している。

前近代を相手にする歴史研究者として、そのようなキャリアや研究の方法・姿勢を当然のように受容し実践する世代が本シンポジウムの担い手であった。日本人研究者による特定時期の比較史料研究について、先人たちの重厚な蓄積を導きの糸としつつも、これが今後の新たなスタンダードとなりうることを強く予感させるものであった。

（武蔵大学人文学部教授）